



現在、約70の海外稲門会が世界各地で活動しています。海外に滞在する際は、現地の稲門会を検索して参加してみましょう。
※一部、活動休止中の稲門会もありますことを、ご了承ください。

会長メッセージ

4年間の任期を経て、会長を後任に託す予定でしたが、新型コロナウイルスのパンデミックの影響の下、1年間任期を延長することになりました。そこで先般、年次総会をリモートに切り替えて開催しました。リモートである利点を生かし、日本から田中愛治総長、ワシントンD.C.からは杉山晋輔駐米大使の他、日本在住の元ニューヨーク稲門会メンバーの皆さまにもご参加いただき、当会メンバーの結束力を高めることができました。

ここ2〜3年、これまでの価値観や行動様式が大きく変化していく時代に差し掛かってきたという印象を持っていましたが、パンデミックを

きっかけに、世界中が急激に変化しています。その変化の波に、これまでの成功体験や知見は押し流され、新しい価値が勃興し始めており、世界中の人がオンラインとリアルの今後の在り方や、人との接し方を模索されているように思います。

ニューヨーク稲門会は全世界に広がる稲門会に声掛けをし、2020年12月12日に「第1回早稲田大学稲門会世界大会」をリモートで開催しました。全世界に広がる校友の絆を確かめ合うリモート行事として次の都市の稲門会へ襷を渡し、継続できればと願っています。

木下信義(1987年社会学)

会員からのメッセージ

当会は、年間のイベント数が多く、新会員も常に増えているので、多くの方と楽しく活動しています。ニューヨークシティマラソンのボランティアや、マンハッタンの夜景を見ながらのパーティーなど、ニューヨークならではの活動もあります。また、さまざまな業界の方がいらっしゃるので、日本では簡単に会えない方とも気楽にお話しできる貴重な機会も多いです。おとしは、国連総会の際に来訪された杉山晋輔駐米大使(校友です!)を囲む会を催し、大変楽しく盛り上がりました。今後も、稲門会の行動力と人脈で、面白い輪を広げていきます!

赤田実穂(1995年法学)

ニューヨークに絶大な人気のMLBチーム、ニューヨーク・ヤンキース。活躍した日本人選手の中で、ワールドシリーズMVPと国民栄誉賞を受賞した松井秀喜さんとエースとして活躍した田中將大さんは、特に地元の人から

(左)松井選手と交流
(右)杉山駐米大使を囲む会



愛されているのではないのでしょうか。

その松井秀喜さんに会うことのできる稲門会のイベントがあります。ニューヨーク・ヤンキースのマイナーリーグ(2軍以下)をみんなで観戦し、そのコーチをしている松井秀喜さんがわれわれのところにあいさつに来てくれるのです。普段は見ることができない松井さんの冗談を言う姿や人としての温かさに触れ、誰もが大きな笑顔になります。家族ごとと一緒に写真も撮らせていただき、夏休みの思い出の1ページを飾ってきました。

2020年は新型コロナのため、この人気イベントの開催はかないませんでした。今後もニューヨークのヒーロー松井さんとの交流イベントを続けていきたいと思います。

加賀一秀(1991年教育)

駐米大使との交流会から早稲田の会まで幅広い活動をしています。毎回集まるたびにエネルギーあふれる稲門会の皆さんに刺激をもらっています。ニューヨークをタフに生き抜くさまざまな年代、業種の方とつながることのできる貴重なコミュニティです。ただまったく堅苦しくなく、高田馬場でたわいもない話をしてきたあの頃のように、気軽に皆さんと話ができるのも当会の魅力だと思います。

三木康子(2010年文学)



2019年、ニューヨークシティマラソンに給水ボランティアとして参加

ニューヨーク稲門会について

1970年に創設され、2020年で50年目を迎えたニューヨーク稲門会。現在の会員数は約430人。年間を通してさまざまなイベントが開催され、最大のイベントである年次総会には100人を超える参加者が集います。永遠のライバルであり仲間でもあるニューヨーク三田会とも交流を深め、ゴルフ対抗戦(年2回)や早慶女子会なども行っています。また、近年は北米内の他の稲門会との交流など、活動もニューヨークにとどまりません。他にも文化講演会や野球観戦会、釣り、ボランティア活動を通して会員同士のコミュニティを広げる場となっています。コロナ禍により対面でのイベントが難しくなった現在も、オンラインでのイベント開催や情報発信により、世代や業種を超えたつながりを保つために積極的に活動をしています。

松原恵子(2003年文学)

ニューヨークの魅力

「集り散じて 人は変れど 仰ぐは同じき理想の光」

皆さんご存じの、校歌の一節。稲門会に限らず、この街では出会いと別れが繰り返され、このフレーズが心に染みます。

今どき、ニューヨーク情報は、本当か嘘かを含めてそこら中にあふれています。しかし、実際に多様な人間や言葉や食が、この規模この密度で実在する状況に直面したとき、私たちは、この街の厚みと深みに恐れ入ることになります。

この都市の成り立ちには、アメリカの理念と歴史が透けて見えます。均等な大きさの都市ブロックは、数値化しやすく、そのブロックの中で、街は競い合うように上へ上へと伸びていきます。積み重なる密度。内部で展開される過密なライフスタイルは加速を続け、この街は他の都市の追従を振り払います。

あるピリオネアに聞いてみました。「あなたは世界中のどこの街でも島でも選ぶことができます。今の時代、仕事場や住居はどこでもいいはずだ。どうしてニューヨークシティにこだわるのか?」。答えはたった一言、「People」でした。

瀧浦 浩(1989年理工)



(上)歴史ある美しい建物、グランド・セントラル駅
(下)ガバナーズ島から見たマンハッタンの摩天楼